

「リーダーの一流、二流、三流」という本からです

三流は、自らが進行役を務め、二流は、将来のリーダーにやらせ、一流は、すべてのメンバーにやらせる

リーダーには、「部下を育成する」という大切な目的があります。「部下育成」は時間がかかるので、生産性と反すると思えることもあります。

しかし、リーダーが仕事を抱えていては、部下がその仕事をできるようにはなりません。いつまで経ってもリーダーがひとつ上の仕事ができないのは、長期的に見ると生産性が悪いと言えます。

会議は「部下育成」ができる大切な場でもあります。

リーダーは、会議の進行役を自ら行うのをやめにしましょう。もちろん、伝達事項もありますから、会議の冒頭か終わりに発言します。

また、会議の中で言い合いなどが起こったり、脱線しそうになったら、口を出す必要も出てくるかもしれませんが、でも、できるだけ黒子に徹するのです。

実は、リーダーが進行役をやらないチーム会議はたまにあります。そういった会議のほとんどは、次世代のリーダー、リーダーの次のポジションにある人が進行役になります。

これは次期リーダーの育成にはとてもいいことだと思います。リーダー予備軍のうちに、リーダーを体験する機会を増やしておく、プレイヤーからリーダーへ昇格したときに仕事の移行がスムーズになるからです。しかし一流のリーダーは、もっと進行役を広げていきます。新入社員などの若手社員にも進行役をさせるのです。

若手社員からすると、会議で決まったことは仕方ないと、受け身の形で仕事をしてしまいがちです。

しかし自分が進行役をして決まったことは、「自分ごと」として能動的にとり組んでいきます。

また、チームやメンバーに自分が認められたいという「承認欲求」も高まり、信頼してくれているリーダーやチームメンバーに貢献しなくてはという「返報性の原則」も生まれます。

また、進行役を担当すると、当然、相手の話を聞かなければなりませんので、「傾聴力」がアップします。さらに、場を仕切るという意味で「ファシリテーションスキル」も磨けますし、先輩との「コミュニケーションスキル」、時間通り終わらせるための「タイムマネジメントスキル」なども身につきます。その他にも、いろいろなスキルが学べます。

なお、進行役を若手にしてしまうと、声の大きい人など圧迫感のある人に押されてしまうのではないかと危惧される方もいらっしゃると思いますが、そのようなときだけは、リーダーが入って、助けてあげればいいのです。

進行役を若手メンバーにも味わわせることは、チーム全体の力の底上げにつながります。

会議は、何ができる大切な場ですか？

( )